

通時的な「自立語化」と「構文化」についての統語の一考察

小川 芳樹

1. 導入

通時的な「文法化」には、内容語から機能語へ、句から語へ、自立語から拘束形態素へという一方向的な変化の傾向があり(Givon 1971, Lehmann 1982, Hopper and Traugott 1993)、語彙化、婉曲語法、置換など、文法化の一方向性に反する現象の総称としての「脱文法化」は、通時的言語変化全体のうちの10%未満であると言われる(Haspelmath 1999, Newmeyer 1998, Heine 2003)。

また、「文法化」は、もともとは単一の語彙の意味と文法機能の通時の変化を捉える概念であったが、21世紀以降の研究者の間では、実際に起こる文法化は、変化を受ける語彙が生じる統語環境・構文の中で起こり、変化の結果としては構文全体が影響を受けるものであるとの認識が広まり、近年、これを「構文化」ないしは「構文変化」という概念のもとで捉え直す試みが盛んになってきている(Bergs and Dievald 2008, Bybee 2010, Hippert 2013)。ここで「構文」とは、「少なくとも部分的に恣意的な意味と形式の組み合わせをもつ統語フレーム」であり、その適用範囲は「形態素から発話のレベルにまで及ぶ」ものとされる(Goldberg 1995, Booij 2010)。

一方、生成文法の極小主義プログラムのもとでも、結果構文や使役移動構文などの項構造構文に対する Mateu and Rigau (2002), McIntyre (2004), Zubizarreta and Oh (2007), Ramchand (2008)などによる統語論的アプローチのもとで、一定の意味に対応する統語フレームとしての「構文」の重要性が再認識され始めている。また、Marantz (1997), Harley (2009)らの分散形態論のもとでは、「語」の概念が認められず、語根の上にとどの機能範疇が積み重なるかによって、形態素から文までのあらゆる統語的単位のサイズが相対化されるため、拘束形態素から文のレベルに及ぶあらゆる「構文化」の過程を、1つの統語サイクルの中で論じることが可能になっている。

これらの背景を踏まえて、本稿では、「統語的構文」と「統語的構文化」の概念を、以下のように定義する。

- (1) 統語的構文: 2つ以上の形態素 (Y1, ..., Yn, X) ($n \geq 1$, X=主要部)の直接的または間接的な併合によりできる統語的構成素のうち、Y1, ..., Yn 中の少なくとも1つが「変項」として機能するもの。
- (2) 統語的構文化: ある時代に特定の主要部 X と特定の非主要部 Y の選択的結合であったものが、のちの時代に、主要部 X と変項 Y が結合してできる最小サイズの統語的「構文」に変化し、さらにのちの時代に、主要部 X を直接支配し変項 Y も含む構成素が、より多くの機能範疇(と Y 以外の変項も)を含むように、そのサイズを一方向的に拡大していく過程をさすもの。

本稿では、これらの定義のもとで、(a) 英語の連結形(combining form; CF)の自立語化と N-N 複合語の発達、(b) 英語の V-A 形式からの結果構文の発達、(c) 日本語の語彙的複合動詞からの統語的複合動詞の発達、の3つの現象を取り上げ、これらについて、いずれも一方向的な「統語的構文化」の例であると主張する。

2. 連結形の自立語化と N-N 複合語の発達

例えば、hydrophobiaの-phobiaのような連結形から自立語としてのphobiaが通時的に発達した過程は、「脱文法化」(Ramat 1992)、「統語化」(Klausenberger 2002)、「語彙化」(Brinton and Traugott 2005)など呼称はさまざまであるが、従来の研究ではいずれも、文法化の一方向性に反する例外とみなされてきた。しかし、現代英語で、かつての自立語が拘束形態素に変化した「文法化」の事例が、形容詞化接辞の-ly (e.g. manly)、名詞化接辞の-hood (e.g. childhood)、-dom (e.g. kingdom)など数例に限られるのに対して、接辞やCFから自立語が発達した事例は、辞書に記載があるだけでも、bus, burger, phobia, logy, ism, hood, teen, holic, ex, bi, pseudo, psycho など二桁にのぼり、これ以外にもade, gate, itis, ocracy, ologyなどを挙げる言語学の文献があることからすると(Brinton and Traugott 2005: 60)、「自立語化」は決して例外的現象だとは言えない。実際、20世紀になって自立語化を起こした接辞とCFのほとんどについて、それをもとにしたstem compoundが当初は1つか2つしかなかったのが19世紀後半から20世紀前半にかけて急速に多様化したという事実や、それらの自立語のうちのいくつか(ex, teen, psycho, bus, burger, phobiaなど)は20世紀後半から21世紀にかけて使用頻度が急増しているという事実を踏まえると、接辞とCFの自立語化は典型的な「構文化」の特徴を備えていると言える(cf. 秋元・前田 2013)。また、Corpus of Historical American English (COHA)によれば、少なくともphobia, phobic, burger, psycho, holicについては、これらに自立語の用法が確立してはじめて、dog phobiaのようなword compoundの用法が出現したという共通の特徴も見られる(holicについては、Urban Dictionaryに自立語の事例が見られるのみで、まだwork holicのようなword compoundの事例は存在しない)。このことからすると、むしろ、2つの連結形を結合してできるclaustrophobiaのようなstem compoundと、2つ以上の自立語を結合してできるdog phobiaのようなword compound は、全く別のメカニズムによって作られる統語的構築物であるとみなすべきである。

そこで、本節では、phobia の自立語化について、(3a-e)のような構文化が起こったと主張する。

- (3) a. 1820年代~1850年代: hydrophobia のみが存在した段階: $[_{nP} n^0 (\phi) [_{CF2} [_{CF1} hydro-] [_{CF2} \cdot phobia]]]$
 b. 1860年代~1910年代: 多様な stem compound が可能になる段階: $[_{nP} [_{CF1} hydro-] [_{n0} [_{CF2} \cdot phob-] [_{n0} \cdot ia]]]$
 c. 1920年代前半~: phobia が a/the などに後続する自立語として使えるようになる段階
 d. 1920年代後半~: phobia against them, phobia about dogs などの例が見られるようになる段階:
 $[_{n2P} n2^0 (\phi) [_{RP} [_{n1P} [_{CF2} phob-] [_{n10} \cdot ia]]] [R \cdot R [_{PP} P (against/about/of) [_{n3P} n3 \sqrt{N}]]]] (R = \text{relator})$
 e. 1930年代~: (3d)の構造から n3P を n2P 指定部に移動することで word compound が可能になる段階:
 $[_{n2P} [_{n3P} n3 \sqrt{dog}] [_{n2} n2^0 (\phi) [_{RP} [_{n1P} phobia] [R \cdot R [_{PP} P (\phi) [_{n3P} n3 \sqrt{dog}]]]]]] (cf. Harley 2009)$
 (3a)の phobia は語根相当の拘束形態素であるので、(4a)が非文であるのと同じ理由で、phobia を代用形の one で置換できないが、(3e)の phobia は RP 指定部を占める句 (= nP)であるので、(4b)と同じ理由で、phobia の部分だけを one で置換できると予測されるが、実際この予測は、(5a,b)の容認性の対比によって支持される。
 (4) a. ?*That student of chemistry and this one of physics sit together.
 b. That students with short hair and this one with long hair sit together. (Harley 2009: 134)
 (5) a. *I have an acrophobia and you have a claustroone. (claustrophobia の意味で)
 b. ?I have a feline phobia and you have a dog one. (dog phobia の意味で)

3. V-A 形式から結果構文への構文化

push open the door という V-A 形式と push the door open という結果構文の関係については、Taniwaki (2006) は V-A 形式は語彙的複合語であって結果構文とは別のものであるとしており、Nagano and Shimada (2009)は Verb-Particle Alternation と同様の統語的な交替現象であると主張している。本節では、これらのいずれの主張とも異なり、むしろ(6)を仮定しつつ、「V-A 形式からの統語的構文化により、結果構文が発達した」と主張する。

- (6) 通時的により早い段階で出現する語順は、共時的にも移動前の、より小さいサイズの構成素から成る統語構造を反映し、そうでない方の構造は、共時的にも派生的な構造を反映している。

ドアの開口行為を表す push, swing, slam, kick, blow, bang, creak, slide, fling, shake, pry, pull, break, throw, cut, burst, tear という 17 動詞を COHA で調べると、例外なく以下の(7a-c)が成り立つことがわかる。これをもとに、「開口行為の結果ドアが開く」の意味の V-A 形式と結果構文について、それぞれ(8)と(9)の派生を提案する。

- (7) a. V open the N の形式も V the N open の形式も 1815 年より前には用例がなく、その後漸増している。
 b. V open the N の形式のほうが、V the N open の形式よりも早い時期か、または同時期に使われ始めた。
 c. V open the N の用例数の合計のほうが V the N open の用例数の合計よりも多い。
 (8) a. $[_{vP} [_{DP} \text{the door}] [v \cdot v (\phi) [_{r} [\sqrt{\text{push}}] [\sqrt{\text{open}}]]]] (\sqrt{\text{push}} + \sqrt{\text{open}} \text{の直接併合})$
 b. $[_{FP} \text{Subj} [F [\sqrt{\text{push}}] [\sqrt{\text{open}}]] + v + F [_{vP} [_{DP} \text{the door}] [v \cdot v (\phi) [_{r} [\sqrt{\text{push}}] [\sqrt{\text{open}}]]]] (\sqrt{\text{push}} \text{の機能範疇 } F \text{ への主要部移動が } \sqrt{\text{open}} \text{ を随伴})$
 (9) a. $[_{vP} [_{DP} \text{the door}] [v \cdot v (\phi) [_{rP} [\sqrt{\text{push}}] [aP a (\phi) [\sqrt{\text{open}}]]]] (\sqrt{\text{push}} \text{ と } aP \text{ の直接併合})$
 b. $[_{FP} \text{Subj} [F [\sqrt{\text{push}}] + v + F [_{vP} [_{DP} \text{the door}] [v \cdot v (\phi) [_{rP} [\sqrt{\text{push}}] [aP a (\phi) [\sqrt{\text{open}}]]]] (\sqrt{\text{push}} \text{ の補部は } aP. \sqrt{\text{push}} \text{ のみが機能範疇 } F \text{ へ主要部移動})$

ここで、(8b)から(9b)への構造変化が「統語的構文化」である。push-open に対してこのような構文化が起こったとする別の証拠として、(A) I pushed the door slowly open./*I pushed slowly open the door.のように、結果構文でのみ push を修飾する副詞が目的語 DP と結果句の間に介在できる、(B) Taro dyed his hair black again. という別の結果構文の事例では Taro が 2 回以上 dye したことが含意されないが (Tomioaka 2011), Taro pushed the door open again. では Taro が 2 回以上 push したことが含意される、(C) pull-openable, push-opener (Nagano and Shimada 2009)、「押し開ける・こじ開ける」といった語彙的複合語が存在する、などの事実が挙げられる。

4. 語彙的複合動詞から統語的複合動詞への構文化

青木 (2010)によれば、日本語の複合動詞の後項に生じる「切る」には、中古語から中世前期にかけては「切断」の意味を表す「断ち切る」などの用法と「強調」を表す「言ひ切る」「思ひ切る」しかなかったが、中世後期には変化動詞に接続して「動作・作用が十分な完結状態に達したこと」を表す「静まり切る・振り切る」などの用法が出現し、江戸期になると、動作動詞や非限界動詞に「切る」が後続し「動作の完遂」の意味をもつ「走り切る・冷えきる」などの用法も発達したという。この変化の過程は、本稿で仮定する(10)の統語構造のもとでは、もともと語根であった「切る」が、Roberts and Roussou (2003: 202)の successive upward reanalysis の原則に従い、Voice の下のアスペクトの機能範疇 Asp1 を経て、Voice の上のアスペクトの機能範疇 Asp2 へと構文化していったものとして分析できる (cf. Nishiyama and Ogawa 2010, Ogawa and Niinuma 2011, Fukuda 2012)。

- (10) $[_{Asp2} [_{VoiceP} [_{Asp1} [v_P [\sqrt{V1} \sqrt{KIR} v] Asp1 (KIR)] Voice (RARE)] Asp2 (KIR)]$